



「転び申さず候」
江戸の殉教者・ペトロ岐部①

喜寿を過ぎて訃報に接する機会が多くなつた。誰もが必ず老いて死を迎える。その死を「殉教」を連想する。信仰のために命を捧げる。信仰とは何だろうか。神は本当におられるのだろうか。殉教者の生き方は、考えれば考えるほど信じがたい。歴史的事実であるにもかかわらず…。

分にとってアクセサリーのような存在だ。だから、殉教は理解出来るように理解出来ない点も多い。なぜサビエルによって初めて日本に伝えられたキリスト教が、短期間に多くの日本人の心をとらえたのだろうか。そして多くの人が殉教するほどの信仰として育まれたのだろうか。改めて188人の殉教者を調べてみると、この中で江戸で殉教したのは2人である。その1人、ペトロ岐部は、大分県国東の出身で、今は記念館や銅像、公園も整備されており、私も何度か訪れたが、江戸で殉教したことは知らなかった。

取り上げるのは読者に失礼かとも思ったが、今日の日本の信仰の自由とも関係があり、今までの準備をしながら書くことにした。それが、ペトロ岐部がここで殉教したのは52歳の時である。大分を出て長崎のセナリオ(神学校)で学び、司祭を志すが実現せず、30歳の時、追放された宣教師として、砂漠を歩いて5万3千*。旅して日本人と



ペトロ岐部について書かれた「殉教者」

江戸傳馬町牢御塚場跡

江戸伝馬町牢屋敷跡の記念碑

今回最初に訪れたのは、この「伝馬町牢屋敷跡」。地下鉄日比谷線、小伝馬町駅のすぐ近くにある。余り歩行し、捕えられ殉教した。出来な妻も娘から送られて来た。一緒に来たの彼の生涯を描いた加賀乙彦著「殉教者」を、常宿の勝乙彦が読む。彼以外にも多数の宣教師が殉教している。改めて「殉教」について考えさせられる。